

みんなのクォーター

第84号

Autumn 2026

音楽で心と心をつなぐ

MIN-ON quarterly

文化でつなぐ
平和の未来

あした

被爆体験を“笑い”で次の世代へ伝える

山崎和幸(長崎被災協・被爆二世の会・長崎 元会長)

ベルファストで見つめた
「平和構築の音楽」の未来

オリビエ・ウルバン(民音研究所 所長)

日本・フィリピン国交正常化70周年記念
フィリピン・マドリガル・シンガーズ
アジアが世界に誇る“東洋の真珠”のハーモニー

マーク・アンソニー・A・カルビオ
(フィリピン・マドリガル・シンガーズ指揮者/芸術監督)

焼け野原から『すべての人』の音楽へ
戦後日本の文化政策と劇場の歩み(第3回)

大澤寅雄(文化commons研究所代表、上席主任研究員)



Min-On quarterly

Autumn

Contents

INTERVIEW

> 3

被爆体験を『笑いで次の世代へ伝える

山崎和幸（長崎被災協・被爆二世の会・長崎元会長）

REPORT 特集

> 4・5

ベルファストで見つめた「平和構築の音楽」の未来

オリビエ・ウルバン（民音研究所所長）

> 6・7

日本・フィリピン国交正常化70周年記念

フィリピン・マドリガル・シンガーズ

アジアが世界に誇る『東洋の真珠』のハーモニー

連載

外交官に聞く79

ドミニカ共和国

エドワード・アニバル・ペレス・レジェス特命全権大使

連載

> 9

新ひとくち西洋音楽史47

ヴェリズモ・オペラからプッチーニ

みんなのクォーターリー
第84号（2026年秋号）

編集・発行 一般財団法人民主音楽協会

発行人 山口浩二

編集・写真 広報宣伝部

デザイン・制作 ASデザイン株式会社

2026年10月5日発行

● 本誌についてのお問い合わせは
（一般財団法人）民主音楽協会
みんなのクォーターリー編集部へ
● 本誌掲載記事および写真の無断転載を
禁じます

REPORT 連載

> 10・11

焼け野原から『すべての人』の音楽へ

（戦後日本の文化政策と劇場の歩み）

第3回：変わりゆく文化政策の役割

MIN-ONキッズフェスタ2026

ビエント 学校コンサート

民音音楽博物館（本館・信濃町）長期休館のお知らせ

被爆体験を“笑い”で次の世代に伝える

長崎被災協・被爆二世の会・長崎元会長 山崎和幸氏インタビュー

長崎市で開催された民音学校コンサートでは、原爆をテーマにした世界初の漫才「原爆体験伝承漫才『希望の鐘』」を上演、大成功をおさめた。お笑い芸人アップダウンによる歌と笑い、そして迫真の舞台には、惜しみない拍手が送られた。この漫才を発案したのが山崎和幸氏だ。『希望の鐘』上演の経緯と想いを聞いた。



山崎 和幸

Profile

Kazuyuki Yamasaki

被爆体験の継承を目的に2012年に結成された「長崎被災協・被爆二世の会・長崎」で、2021年6月から2026年5月まで会長を務める。また、長年にわたり、南米音楽「folklore」のグループの招聘を通じてペルーへの支援活動を行う団体「アンデスの風」の会長を務めた。

聞き手、文：丹野由夏

01 「このままでは伝わらない」 強い危機感

——原爆を漫才で伝えようと思ったきっかけを教えてください。

山崎 長崎では、81年前の原爆投下により、

これまで20万人以上の尊い命が失われまし

た。被爆体験を継承していくことはとても大

切ですが、一方ではとても難しいのです。た

とえば、被爆者が修学旅行生に向けて体験の

講話をしても、生徒たちにとっては非常に堅

苦しく、怖くて、現実離れしている話に聞こ

える。聴きながら眠ってしまう生徒もいます。

このままでは被爆体験が後世に伝わらないという強い危機感がありました。そんな時、歴

史上の出来事を題材に漫才をしているアップ

ダウンのお二人を知って、原爆を題材に漫才

を組み立ててほしい」と依頼をしたのです。

——お二人の反応は？

山崎 最初の答えは「自分たちは原爆のこと

を知らないし、荷が重すぎます」と。でも私

は「あなたたちと同じような、原爆とは関係

のないごく一般の方に話してもらうことが大

切なのです」と懸命に説得しました。最終的

には、お二人も「やります」と決意し、シナ

リオを作ってくださいました。

——山崎さんの周囲の方はどう捉えていたのでしょうか。

山崎 ほとんど全員から、強い反対と拒絶を

受けました。「ノーベル平和賞に結び付けら

れるような活動をお笑いで広めるなんて」と

叱られたことも。ですから2021年の初演

は、長崎被災協の事務所の地下講堂という、

200人ほどが入る小さな会場で開催するこ

とにしました。

山崎 最初、お客様のほとんどが、「本当にできるのか？」と不安そうな様子でした。

しかし開演すると、お客様の表情が変わり

目が輝いてきた。40分ほどの短い公演でし

たが、終わったとたん、狭い会場が割れ

るほどの大きな拍手と感動に包まれました。

まさかこんなに大きな反響があるとは思

いませんでした。終演後にはお客様から「伝

えたいことが全部、心の中に素直に入っ

てきた。この体験は忘れられないと思います」

との感想をいただきました。この公演の模

様はNHKニュースで全国放送され、海外

にも報道されました。

——『希望の鐘』は初演以降、これまで全国で50回以上も上演されていますね。

山崎 被爆体験を継承する私たちにとって、

この漫才が継続上演されることは大きなパ

ワーになっています。今年は民音さんのご協

力のもと、子どもたちの教育の場で開催され

ました（学校コンサート）。とても有意義な

ことだったと感謝しています。

今後も被爆の大変さを、一般の方が興味を

持てる形で伝える活動を続け、次の世代に継

承していかなくてはいいけないと考えてい

ます。

——初演での反応はいかがでしたか？

ベルファストで見つめた「平和構築の音楽」の未来

民音研究所 所長 オリビエ・ウルバン

民音研究所(MOMRI)は今年6月、英国・北アイルランドのベルファストで、第2回「平和構築の音楽」ワールドサミットを開催。世界各国の研究者、教育者、実践者が集い、「平和構築の音楽」の未来について議論しました。今回、民音研究所長のオリビエ・ウルバン博士が、現地での出会いや対話を振り返ります。



オリビエ・ウルバン

Profile

Olivier Urbain

1961年ベルギー生まれ。米・南カリフォルニア大学で文学博士、英・ブラッドフォード大学で平和学博士を取得。大学教授、戸田記念国際平和研究所所長を歴任し、現在は民音研究所所長。国際平和研究協会(IPRA)「平和構築の芸術と音楽」委員会の創設者で、約20カ国で音楽を通じた平和構築に関する講演や研究発表を行っている。

今回、ベルファストで開催したことには大きな意味があります。北アイルランドは、長年にわたる深刻な分断と暴力を経験しながら、対話と相互理解を通して和解への道を歩んできた場所だからです。

ところが、サミットが始まったまさにその時期、ベルファスト周辺では人種差別や反移民感情を背景とする暴動が発生しました。大衆も一時閉鎖され、私たちも予定を変更しながら会議を続けることになりました。

平和構築のための研究アジェンダを前進させようと集まった私たちのすぐそばで、再び緊張と分断が表面化している――。平和とは一度実現すれば完成するものではなく、人と人との対話と信頼によって、絶えず築き続けなければならぬものであることを、あらためて考えさせられました。

しかし、これだけがベルファストの姿ではありません。その約2カ月後には、アイルランドの音楽と文化を祝う大規模な祭典が開催され、約2000の催しに多くの音楽家や歌手、ダンサーが参加し、165万人もの人々が訪れました。分断という現実を抱えながらも、

音楽や文化を通してこれほど多くの人々が共に集う。それもまた、私たちがベルファストで考えた「平和構築の音楽」と深く重なる光景だと思っています。

ベルファストでは、心に残る出会いもありました。現地で芸術活動に取り組む一人の若い女性は、母国で抑圧を経験し、難民として北アイルランドへやって来た人でした。現在、彼女は芸術を通して様々な人々と出会い、地域社会に自らの居場所を見いだしています。

芸術が過去の苦しみを消してくれるわけはありません。しかし芸術には、人が自信を



▲民音研究所の海外研究員と

取り戻し、他者とのつながりを育み、自らの人生と社会との関係を築き直すことを支える可能性があります。

音楽についても同じです。音楽そのものが戦争や紛争を直接解決するわけではありません。

しかし、言葉や文化、宗教、民族的背景の異なる人々が同じ場に集まり、共通の経験を持つ機会を生み出すことはできます。そこから対話や相互理解が始まり、共感や信頼が育まれる可能性があります。

音楽は平和そのものをつくる魔法ではありません。しかし、人々が出会い、対話し、関係を結び直すための「条件」をつくるこ

とはできる。私たちは「平和構築の音楽」

という研究を通して、その可能性を探究しています。

その研究は少しずつ具体的な形となつて世界へ広がっています。今回参加したナイジェリアの研究者は、2021年、博士課程在籍中に私とオンラインで出会い、民

音研究所が推進する「平和構築の音楽」の考え方に触れました。その後、民音研究所の協力研究員となり、現在ではナイジェリアで「平和構築の音楽」の講座を開設し、異なる部族や宗教の人々が同じ音楽で踊り、互いにつながることを目指した活動にも取

り組んでいます。一つの出会いが研究を生み、研究が教育となり、さらに地域社会での実践へと広がっていく。私はそこに、民音研究所が目指してきた一つの姿を見る思いがします。

今回のサミットでは、簡単には答えのない問題について何度も議論しました。そんな時、ある参加者が印象的な言葉を語りました。

「私たちは長い旅の途中にいる。今、すべての答えを出そうと急ぐ必要はない。50年後、100年後の民音研究所を考えよう」

平和への道に近道はありません。だからこ

そ、急ぐのではなく、対話を重ね、人と人との信頼を育みながら、一步一步、着実に進んでいくことが大切です。そして、その歩みを次の世代へとつなぐ持続可能なものにしていかなければなりません。

ベルファストで私たちが始めたのは、完成された答えをつくることではありません。「平和構築の音楽」という分野が、人類の平和のために何を研究し、何を実践していくべきなのか――その未来を描く研究アジェンダを、世界の仲間と共につくり始めることでした。

民音研究所が設立されてから12年。「平和

構築の音楽」という考え方を世界に発信し、その研究の重要性を訴えてきました。これからさらに一歩進み、音楽活動が平和構築にどのように役立つのかを、具体的な研究と証拠によって明らかにしていく段階にあります。

50年後、100年後を見つめながら、音楽を通して人と人が出会い、対話し、信頼を育むことのできる社会を目指して、民音研究所はこれからも世界の仲間と共に、一步一步、着実に歩み続けていきたいと思っています。



▲対話を重ね、一步一步、着実に

日本・フィリピン国交正常化70周年記念

フィリピン・マドリガル・シンガーズ

アジアが世界に誇る「東洋の真珠」のハーモニー

日本・フィリピン国交正常化70周年の佳節となった2026年7月。フィリピンを代表する合唱団「フィリピン・マドリガル・シンガーズ」の来日公演が全国各地で行われ、好評のうちに幕を閉じた。

「マドリガル」とは16世紀頃にヨーロッパで発展した楽曲形式であり、食卓を囲んで人間の感情や日常生活を歌う世俗的なテーマが特徴。半円に椅子を並べて歌うスタイルが生み出す独特な一体感とハーモニーは、フィリピン・マドリガル・シンガーズの魅力の一つであり、「ヨーロッパ合唱グランプリ」で2度の優勝に輝くなど彼らへの世界的な評価は高い。今回は、2001年から指揮者を務めるマーク・アンソニー・A・カルピオ氏に、音楽との出会いや合唱団への思いを聞いた。



マーク・アンソニー・A・カルピオ *Profile*

MARK ANTHONY A. CARPIO

(芸術監督・合唱指揮者)

フィリピン大学で合唱指揮修士号とピアノ科学士号を取得し卒業。2001年、創設者ベネラシオン教授の指名でフィリピン・マドリガル・シンガーズの指揮者に就任。国際コンクールで数々の優勝に導き、世界各地で審査員・講演者として活躍。現在はフィリピン大学音楽学部で指揮・合唱を指導。

——音楽を始めたきっかけを教えてください。

大学でもピアノを専攻しました。また、歌も小さい頃から好きで、学校の合唱団にも所属していました。

父の方針で幼い頃からピアノを習い始めたことがきっかけです。高校生になるまで

所屬していました。

——音楽の道をまっすぐ歩んで来られたので

すね。

実のところ、大学進学を考える際には、当初父の背中を追って「エンジニアになりたい」と思っていました。しかし、父から「まず音楽を勉強したら、その後に好きなことを勉強したらいい」と音楽の専攻を強く勧められたのです。当時としては、親が子どもに収入が不安定な音楽の道を勧めることはとても珍しいケースでした。

——マドリガル・シンガーズにはいつ頃加入

されたのですか。

大学に入学した1984年の時点で、

マドリガル・シンガーズの存在は知って

いましたが、そのときは勉強との両立が

当初から「HEARTS」という言葉を大切に

——マドリガル・シンガーズにはいつ頃加入

ついて教えてください。

大学に入学した1984年の時点で、

マドリガル・シンガーズの存在は知って

いましたが、そのときは勉強との両立が

当初から「HEARTS」という言葉を大切に

——マドリガル・シンガーズにはいつ頃加入

ついて教えてください。

大学に入学した1984年の時点で、

マドリガル・シンガーズの存在は知って

いましたが、そのときは勉強との両立が

当初から「HEARTS」という言葉を大切に

——マドリガル・シンガーズにはいつ頃加入

ついて教えてください。

大学に入学した1984年の時点で、

マドリガル・シンガーズの存在は知って

いましたが、そのときは勉強との両立が

当初から「HEARTS」という言葉を大切に



▲音楽は一方的に届けるものではなく聴衆と分かち合うもの

してきました。これは「Humility（謙虚さ）」「Excellence（卓越性）」「Artistry（芸術性）」「Responsibility（責任）」「Trust（信頼）」「Service（奉仕・貢献）」の頭文字をとったものであり、「心から歌う」という理念を表す言葉でもあります。

——創設者のベネラシオン氏はどのような存在でしたか。

一言で表現すれば「師」と呼べる存在です。音楽に対してはとても厳格であり、声の使い方から身体のケア、コンサートのプログラミングに至るまで厳しく教わりました。しかし、ひとたび音楽を離れると、母

親のように温かく励ましてくれる存在でもあります。特に私が指揮者になってからは、すべてを細かく指示するのではなく、ある程度は自由に任せてもらえました。失敗を経験させ、そこから私自身が学びを得られるように導いてくださったのだと思います。

——団員は何人いらっしゃるのですか。

およそ20人前後の団員で構成されており、現在は21人が在籍しています。加入するには歌唱や面接などのオーディションを経て、トレーニング期間を乗り越える必要があります。限られた枠を目指して多くの人が挑戦を重

ねてきました。団員はフィリピン大学の音楽学部出身者が多いですが、現在では他の大学やコミュニティからもメンバーを受け入れています。

——優れた個性や声を持つ団員たちが一つの合唱をつくるうえで、大切にされていることは何でしょうか。

団員たちはそれぞれ異なるバックグラウンドを持っているのですが、リハーサルの場に入ったら、自分のキャリアや専門性は、いったん忘れるようにしています。全員が自分より大きなものの一部として、同じ目標に向かって互いを信頼す

ることで、初めて一つの音楽が生まれるのだと思います。

——公演を鑑賞した方から「とても楽しそうに歌っていて、見ているこちらまで楽しくなった」という声があがりました。

とてもうれしいですね。今回の日本公演では、お客様が笑顔になり、心を開いて私たちの音楽を聴いてくださっているのが印象的でした。そうした反応に私たちも刺激を受け、より良いステージへ発展していったのだと思います。

——最後に、日本公演を終えた感想を教えてください。

どちらかと言うと日本のお客様はシャイで、あまり感情を表に出さないと聞いていましたが、今回の公演でそうした印象がガラリと変わりました。手を振ってくださる方も多く、その場を心から楽しんでる様子が伝わり、私たちの音楽を前向きに受け止めていただいていることが実感できました。私たちは「音楽は一方的に届けるものではなく聴衆と分かち合うもの」という意識を持っているので、共に楽しむことができたのなら、これより嬉しいことはありません。



▲公演は 2026 年 7 月に全国 8 都市で開催



ミュージックジャーニー
～ドミニカ共和国編～はこちらから▲



the Dominican Republic

エドワード・アニバル・ペレス・レジェス 特命全権大使

ドミニカ共和国



His Excellency Mr. Edward Aníbal PÉREZ REYES

——日本に赴任され、実際に暮らす中で、日本への印象はどのように変わりましたか。

大使：来日前、日本といえば「テクノロジー」「効率性」「規律」というイメージを持っていました。しかし実際に暮らしてみると、その背景にもっと深いものがあると気づきました。特に感銘を受けたのが、人々の「敬意」の精神です。高齢者への敬意や、公共の場所を大切に作る姿勢など、日本社会に根づく価値に強く心を動かされました。

——ドミニカ共和国の人々にとって、音楽やダンスはどのような存在ですか。

大使：ドミニカ共和国は、アフリカ、ヨーロッパ、先住民、カリブなど、さまざまな文化的ルーツが融合した、とてもダイナミックな国です。メレンゲとバチャータは、私たちのアイデンティティを形づくる大切な音楽であり、若い世代はデンプウなど新しい音楽も取り入れながら、独自の表現を発展させています。

私自身、子どもの頃に母からメレンゲの踊り方を教わりました。私たちにとって、音楽やダンスは日常生活の一部であり、家族や人々を近づけてくれるものです。

先日、千代田区の国際交流イベントに参加した際には、92歳の日本人女性が誰よりも元気に踊っていました。私も日本人の女性から「一緒に踊りましょう」と誘われ、とても感動しました。その時、「母がダンスを教えてくれたのは、この日のためだったのかもしれない」と思いました（笑）。

——今後、民音とどのような文化交流を期待されますか。

大使：これまで民音がドミニカ共和国との文化交流を重ねていることに、心より感謝申し上げます。これからは、アーティストが互いの国を訪れるだけでなく、ドミニカ共和国と日本の若い音楽家たちが一緒に演奏し、新しいものを生み出すような交流が実現できればうれしく思います。

音楽は「世界共通の言語」です。一つの音楽やダンスが、時には飛行機よりも速く、人と人との心を結びつけることがあります。外交は政府と政府との関係だけではありません。人と人とが直接心を通わせる「草の根外交」が、とても大切だと思っています。

音楽を通して、両国の人々が出会い、互いを知り、友情を深めていく。そんな交流を、民音の皆さまと共に実現できればと思います。

——異なる文化を持つ人々と友情を築くために、若い世代へ伝えたいことはありますか。

大使：異なる文化に心を開き、「違い」を恐れないでほしいと思います。相手に歩み寄り、その違いを知ろうとすると、そこから学べることが多くあります。異なる文化を持っていても、同じ人間であり、共感できる価値がたくさんあります。互いを尊重し、異なる文化から学ぶことは、自分自身を豊かにします。日本には世界に伝えることのできる素晴らしい価値がたくさんあります。同時に、ほかの文化にも心を開いてほしいと思います。互いの違いを尊重し、学び合うことが、世界の人々との友情を築く第一歩になるのではないのでしょうか。



▲ドミニカ共和国民族舞踊団（2000年）

*デンプウ（Dembow）：ジャマイカのダンスホールなどの影響を受け、ドミニカ共和国で独自に発展したアーバンミュージック。力強く反復的なリズムが特徴。

ヴェルディ後の新しい傾向のオペラとして登場したのがヴェリズ

モ・オペラです。ヴェリズモ(「真実主義」「現実主義」)は、フランスのエミール・ゾラ(1840~1902)の社会の底辺を描いた自然主義文

学に対応するもので、ジョヴァンニ・ヴェルガ

(1840~1922)が、郷里のシチリア島を舞台

にして書いた小説群がその草分けになりました

た。神話や英雄譚(えいゆうたん)ではなく、

日常的な題材による人情の機微が描かれます

が、地方色が強く、むき出しの感情と抑制の

効かない行動がもたらす悲劇が典型的なもの

です。ピエトロ・マスカーニ(1863~1945)

の《カヴァレリア・ルスティカーナ(田舎の騎

士道)》(1890)の原作はヴェルガです。現在、これと組み合わせ

上演されることが多いルッジェーロ・レオンカヴァルロ(1858~

1919)の《道化師》(1892)は、やはり貧しいイタリア南端のカラ

Classical Music History 新ひとくち西洋音楽史

47

ヴェリズモ・オペラから プッチーニ

石田 一志

ブリア地方で起こった実話を扱っています。

19世紀末から20世紀初頭にかけてもっとも活躍したのはジャコ

モ・プッチーニ(1858~1924)でした。イタリア中部ルツカの教会

音楽家の5代目でしたが、76年にピサで観た

《アイーダ》に魅せられ、教会音楽ではなくオ

ペラ作曲家への道を進みます。奨学金を得て

ミラノ音楽院で学び、卒業の年の83年に「幕

オペラのコンクールに応募。この《ヴィツリ》

は選にはもれましたが、私的なサロンで話題

となり出版社のリコルディと作曲家のボイト

の尽力で上演機会を得て成功を収めます。第

2作の《エドガール》(88年初演のち改訂)は

失敗に終わりましたが、93年にトリノで初演された3作目は自身2

度と味わうことのない大成功でした。これはジュール・マスネの《マ

ノン》(1984)と同じアベ・プレヴォの原作による《マノン・レス

コー》で、名声は一挙に世界的になりました。なお94年のロンドン公演を観た劇作家のバーナード・ショーは、早くもプッチーニをヴェルディの後継者と呼びました。

さらにトリノでトスカニーの指揮で《ボエーム》(1896)、ローマ

で《トスカ》(1900)、ミラノで《蝶々夫人》(1904)が初演されるな

ど、代表作が続きます。これらは《マノン・レスコー》の台本づくりに最後に関わった、2人の詩人ルイージ・イルリツカとジュゼッペ・

ジャコーザが緊密な協力者でした。出版のリコルディは作曲家とこ

の詩人たちを「三位体(さんみいったい)」と呼んだほどです。

1907年アメリカに渡り、そこで題材を得た《西部の娘》(1910)

がニューヨークで初演されます。ウィーンのオペレッタ風の《つばめ》

(17)がモンテカルロで、さらに三部作の《外套(がいとう)》(18)、

《修道女アンジェリカ》(18)、《ジャンニ・スキッキ》(18)が再び

ニューヨークで初演されました。三部作はパリのグラン・ギニョール

劇の構成「恐怖譚・感傷悲劇・喜劇」ともダンテの「神曲」の「地獄

篇・煉獄(れんごく)篇・天国篇」に基づいているともいわれています。いずれにせよ第二ヴェリズモの悲劇・第2作は感傷的な神秘劇・第3作はヴェルディの《ファルスタフ》と並ぶオペラ・ブッフアの最高傑作です。

そしてプッチーニは最後の作品となるカルロ・ゴッツイ(1720~1806)の寓話劇(ぐうわけぎ)を原作とする《トゥーランドット》を作曲中に咽喉(いんこう)がんで病床に付き、完成を見ず24年11月29日に療養先のブリュッセルで亡くなりました。未完の《トゥーランドット》は友人のアルファードによつて補筆完成されています。



ピエトロ・マスカーニ



ジャコモ・プッチーニ



ルッジェーロ・レオンカヴァルロ

似顔絵イラスト：小澤一雄

焼け野原から『すべての人』の音楽へ （戦後日本の文化政策と劇場の歩み）

第3回…変わりゆく文化政策の役割



大澤 寅雄

Profile

Torao Ohsawa

1994年、慶應義塾大学卒業後、シアターワークショップにて公共ホール・劇場の管理運営計画や開館準備業務に携わる。2003年、文化庁新進芸術家海外留学制度により、アメリカ・シアトル近郊で劇場運営の研修を行う。帰国後、NPO法人STスポット横浜の理事および事務局長、東京大学文化資源学公開講座「市民社会再生」運営委員、ニッセイ基礎研究所芸術文化プロジェクト室主任研究員を経て2023年4月に文化コモンズ研究所を設立、代表・主任研究員に就任、2026年4月から上席主任研究員。

01

「公設民営劇場」の誕生から 始まる文化政策の変化

1995年に発生した阪神・淡路大震災は、文化芸術関係者に多くの影響を及ぼした。被災者への感情的な配慮から様々な文化芸術活動の自粛や公演中止があった。その一方で、延べ130万人を超える市民がボランティアとして被災地に駆けつけたことから、日本における「ボランティア元年」とも呼ばれている。これを契機に任意団体であった既存のボランティア団体の立場を強化すべきという声が高まり、「特定非営利活動促進法（NPO法）」が

1998年に実現した。

実は、NPO法人の認証の全国で第一号が、北海道の富良野市の「ふらの演劇工房」であり、2000年には全国初の「公設民営劇場」として富良野演劇工場が開館した。「公設民営」、つまり、国や地方公共団体が施設を設置し、施設の運営は民間事業者に委ねることで、民間のノウハウを取り入れる仕組みである。この公設民営の事例には、福岡市と地元経済界・興行界が1999年に設立した博多座も含まれている。こうした動きに、2001年以降、当時の小泉純一郎内閣が進めていた「聖域なき構造改革」が結びつき、後述する「指定

管理者制度」へと流れていく。俯瞰すると、公

共サービスを市場に委ねて民営化する「官から民へ」という自民党の政策と、その後、2009年に民主党政権が掲げた「新しい公共」という文脈に繋がる非営利公益活動を主体とする政策、一見すると異質な流れが、2000年代に混じり合っていたことになる。

02

文化芸術振興基本法の目的と 指定管理者制度による変化

こうした流れとは別に、2001年、文化芸術振興基本法が超党派の議員立法によって全会一致で可決、成立した。それまでは社会教育法

（1949年）、図書館法（1950年）、博物館

法（1951年）といった社会教育三法と呼ばれる法律はあったものの、実は日本には文化芸術の振興に関する法律が存在していなかったのである。この法律の目的は「文化芸術の振興に関する施策の総合的な推進を図り、もって心豊かな国民生活及び活力ある社会の実現に寄与すること」である。前回の本稿（第2回…物の豊かさ「から」心の豊かさ「へ」？）で述べた「心の豊かさ」につながる「心豊かな国民生活」が、法律の目的となっている。その後が始まったのが、2003年の指定管理者制度だ。地方自治法に位置付けられた

「公の施設」の管理を営利企業や公益法人などに包括的に代行させることができるようになった。「官から民へ」のスローガンが文化芸術の領域でもっともわかりやすい形で現れた法改正だ。公立文化施設の管理運営に、財団法人やNPO法人といった公益目的の法人だけでなく、株式会社などの営利目的の法人も参入が可能になった。行政の直営という選択肢もあるが、多くは指定管理者制度を導入するようになり、事業者を公募し、事業の協定期間が限定された。このことは、文化施設が管理運営や事業の内容だけでなく、それらに係る価格競争や経費節減が評価さ

れ、雇用の不安定化にもつながった。そのことで「心豊かな国民生活及び活力ある社会の実現に寄与する」という文化芸術振興基本法の目的がないがしろにされているように見受けられるケースも少なくない。

に悩む欧米の都市が、文化芸術の創造性を活かした都市再生を試みて成功を収めた。ユネスコが「創造都市ネットワーク」事業を開始した2004年に、日本では横浜市が「文化芸術都市創造事業本部」を設置。神戸市（デザイン）、名古屋市（デザイン）、金沢市（工芸）など、12の都市がユネスコの創造都市ネットワークの認定を受けている。ユネスコ創造都市ネットワークの目的を見ると、「創造性を都市開発の重要な要素とするために、特に、公共部門、民間部門、市民社会が関与するパートナーシップを通じて、加盟都市が主導する取組を促進し、強化する」とある。

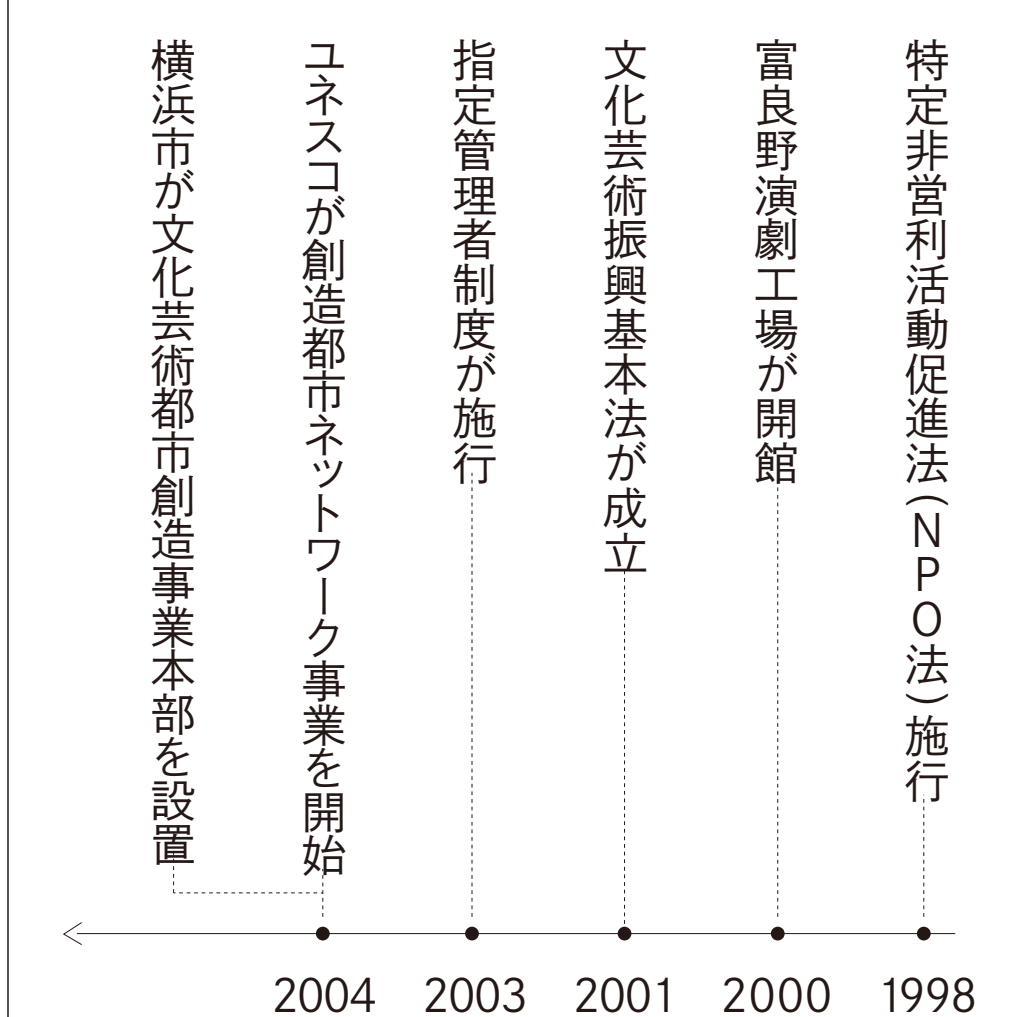
03 「文化の時代」から変化する文化政策の役割

そしてもう一つの節目となる変化が、2000年代に世界各都市で現れた「創造都市（クリエイティブ・シティ）」という、文化芸術と産業経済との創造性に富んだ都市政策の考え方である。産業空洞化と地域の荒廃

つまり都市開発の戦略として文化芸術を活用することが、その目的なのである。

2000年代は、前世紀の後半、つまり戦後日本の文化政策が希求してきた「文化の時代」や「心の豊かさ」といった熱を帯びた言葉から、21世紀に突入し、新たに突きつけられた厳しい現実、すなわち「聖域なき構造改革」や「衰退した都市の再生」という文脈で、文化政策に求められる役割自体が大きく変化した。別の言い方をすれば、文化芸術が、もはやそれ自体の価値が自明であり、それ故に国民に振興すべきだという「聖域」を、政府が守れなくなったのだ。（次号に続く）

《年表》



親子で世界の音楽やワークショップが 楽しめるMIN-ONキッズフェスタ2026を 4都市で開催！

民音では、子どもから大人の方まで、音楽の楽しさや素晴らしさに触れ、夏休みの特別な思い出をつくらせていただけるよう、2022年から「MIN-ONキッズフェスタ」を各地で開催しています。本年は7月から9月にかけて、石狩市(北海道)、金沢市(石川県)、松前町(愛媛県)、八女市(福岡県)の4都市で開催。多くの皆さまにご来場いただきました。

世界の「生の音楽」や「民族楽器」との出会いなどを通して、子どもたちの豊かな感性を育ていけるように全国へ広げてまいります。



石狩市(北海道)



金沢市(石川県)



松前町(愛媛県)



八女市(福岡県)

インストゥルメンタル・デュオ「ビエント」の 学校コンサートを九州2校で開催！

9月15日(火)、9月18日(金)の2日間、ケーナ・オカリナ等の民族楽器奏者である吉川万里さんとシンセサイザー奏者の竹口美紀さんによるインストゥルメンタル・デュオ「ビエント」の民音学校コンサートを福岡・鹿児島の2県で開催しました。ベートーヴェン作曲「悲愴」第二楽章、テレビでもおなじみの「ピタゴラスイッチ」、アルゼンチン・タンゴの名曲「ラ・クンパルシータ」など、バラエティ豊かな楽曲を披露。児童たちの大きな歓声と拍手に包まれました。



民音音楽博物館(本館・信濃町) 長期休館のお知らせ

民音音楽博物館(本館・信濃町)の展示フロアは、空調設備の改修工事のため、下記の通り、長期休館いたします。

【休館期間】2026年9月28日(月)～2027年1月初旬(予定)

【対象エリア】民音音楽博物館(1階、2階の全展示室)
みんおんプラザ(ミュージアムショップ)

なお、音楽ライブラリーは、通常通り開館いたします。

再開の詳細につきましては、決まり次第、民音音楽博物館公式サイトにてお知らせいたします。
<https://museum.min-on.or.jp/>